

# 長崎に限らない —— 近世日本古典籍がロシアに渡った経緯について ——

## ワシーリー・シエプキン

はじめに

二〇一五年から二〇一七年にかけてロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所の日本研究者は、ロシア人文科学基金の援助を得て、『テキストとしてのロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所蔵日本古典籍コレクション・個人的収集活動と国益』というプロジェクトを実施した。プロジェクトの目的は、本研究所蔵日本古典籍の収集・譲渡の経緯を明らかにしながら、日露関係史における日本書籍収集活動の役割を追求することにあつた。

このプロジェクトは、ちょうど同時期に実施されたロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所と北海道大学アイヌ・先住民研究センターとの共同研究である「サンクトペテルブルク市所在アイヌ関連古文獻に関する国際共同研究」と時期的に重なっていたこともあり、当該共同研究に参加した日本側の専門家の助力も得ることができた。その結果、安永年間のロシア人蝦夷地探検の際に日本側から渡された古文書から、第二次世界大戦後にレニングラードに譲渡された樺太旧蔵書におよぶ、非常に幅広い期間の、ロシア人による日本書籍収集活動の歴史を明らかにすることができた。

ここでは、こうした研究の成果のうち、主に近世日本からロシアに渡った書籍の経緯などに関する研究成果をまとめておきたいと思う。

### 1. ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所蔵日本古典籍の概要と整理の沿革

ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所は、アジア・アフリカの言語で書かれた写本・版本に関するロシア最大のコレクションを保管している。そこには、西夏語や契丹語のような現在では存在しない言語も含めて六五の言語で記された写本や版本を、一〇万部以上所蔵している。

ロシアにおいて東洋の典籍や物質文化資料などの収集が始まったのは、一七世紀以降のことである。この時期以降、東洋の文物を外交官や商人が購入し持ち帰ったり、東洋の国々の大使がロシア宮廷に贈呈したりするようになったのである。東洋の典籍がロシア最初の博物館・クンストカメラに収められたのは一七一四年から、ロシア科学アカデミー附属図書館に保存されたのは一七二四年からのことである。そしてロシア科学アカデミーには一八一八年に、アジア諸国から齎された書物、硬貨、美術品を保管する施設としてアジア博物館が設置された。ロシア革命後、一九三〇年に、アジア博物館はソヴィエト科学アカデミー東洋学研究所へと名称を変更し、組織が改編された。一九五六年に東洋学研究所は本部をモスクワに移転したが、サンクトペテルブルグ（当時レニングラード）の研究所はその支部として存続し、ソ連崩壊後も同様であった。その後二〇〇七年に、東洋学研究所サンクトペテルブルグ支部は東洋古籍文献研究所と改名のうえ独立し、現在に至っている。

東洋古籍文献研究所が保管する明治初期以前の日本語の写本・版本のコレクションは、おおむね九〇点ほど（三〇八二冊）の規模で、大英博物館、ライデン大学に次ぐヨーロッパ第三のコレクションとみなされる。このコレクションの嚆矢となったのは、一七九一年に有名な日本漂流民の大黒屋光太夫がエカテリーナ二世に献呈した一二冊の写本と版本である。次に年代の古いものは、旧長崎オランダ商館医I・A・シュトゥッツェルが同じくエカテリーナ二世に送付した日本の物品・書籍コレクションであり、これらは一七九五年一月にロシア科学アカデミーの会議で報告されている。

一七九八年にロシア科学アカデミー附属図書館の館長ヨハン・ブッセがラテン語で作成した『中国語、満洲語、日本語、モンゴル語、チベット語で書かれた書籍の目録』には、日本語で書かれた本が二二点入っており（ブッセ一七九八）、上記の二つのコレクションがこれに相当すると考えられる。また、一八一八年にロシア正教北京伝道団の通詞リポフツェフとカメンスキーによって作成された『帝国科学アカデミー図書館所蔵の中国と日本の古典籍目録』には、日本語の本が二九点記載されており（カメンスキー一八一八）、これには一七九八年から一八一八年の間に露米会社などが図書館に譲渡した書籍が含まれる。さらに、一八四〇年から一八六四年のあいだに、アジア博物館の職員M・F・ブロッセが中国語や日本語の書籍目録を作成したが、ここにリストアップされた日本語の書籍は八〇点近くにのぼる。

上記の三つの目録を比較研究しながら、現存書籍の確認調査をおこなったところ、以下のようなコレクションに区分することができた。

## 2. 大黒屋光太夫旧蔵書籍とI・A・シュトゥッツェル旧蔵書籍

大黒屋光太夫旧蔵書籍を、他の日本語古典籍から最初に区分したのは、

一九三〇年代から一九六〇年代にかけてロシア科学アカデミー東洋学研究所に勤めていたO・P・ペトロワ氏である。氏の論文『大黒屋光太夫旧蔵書籍とその日露文化交流史における意義』には、上記のヨハン・ブッセによる目録とI・A・シュトゥッツェル自筆の郵送品一覧に基づいて、大黒屋光太夫旧蔵書籍とI・A・シュトゥッツェル旧蔵書籍とを弁別した（ペトロワ一九七〇）。

まず、六本の書籍には光太夫自筆の墨書があることで、光太夫旧蔵書に属することがわかる。その中の、B-13『源平曠軍配』の表紙表書に次のようなものがある（数字は筆者がつけた）。

- (1) 志やうる利本七冊
- (2) 手本巻冊
- (3) 節用式冊
- (4) 源平多入三冊
- (5) 森か、み巻冊
- (6) 多本巻冊
- (7) 太平記巻冊

東洋古籍文献研究所所蔵の日本古典籍を調査したところ、以下の光太夫旧蔵書の現存が確認できた（表1）。

このリストに、浄瑠璃本は光太夫が記載した七冊ではなく、四冊にとどまる（B-3、B-6）。ペトロワ氏によると、残りの三冊はゲオルグ・フォン・アッシュによりドイツへ持ち帰られ、ゲッティンゲン大学に譲渡されたという（ペトロワ一九七〇・五六）。また、「手本巻冊」と「節用式冊」はイルクーツクにあった日本語学校へ渡されたことが考えられるが、後に露米会社から他の書籍と一緒にまたペテルブルク

表 1

請求番号	書名	冊数	種類	光太夫自筆記
A-12	太平記	1冊 (第31、32)	版本	有
A-86	西國三十三所順礼えんぎ	1冊	版本	無
B-3	番場忠太紅梅簾	1冊	版本	有
B-4	撰州渡邊橋供養	1冊	版本	有
B-5	大塔宮噉鏡	1冊	版本	無
B-6	奥州安達原	1冊	版本	無
B-13/B-140	源平曦軍配	3冊 (第2、3、4)	版本	有
B-156	絵本寫寶袋	1冊 (第3)	版本	有
B-157	森鏡邪正録	1冊 (第8)	写本	有
C-320	暦 (天明二年)	1冊	版本	無

に戻された可能性もある。

なお、A-86とC-320は光太夫自筆の一覧には見当たらないが、I・A・シュトゥツェル旧蔵書リストにはみえず、一七九八年のヨハン・ブッセの目録に記載されていることから、光太夫所蔵のものである可能性が考えられるので、ここでは上記の表に含めた。ブッセ目録には、大黒屋光太夫旧蔵書とともに、I・A・シュトゥツェル旧蔵書も収められているからである。

以上に触れたように、I・A・シュトゥツェルがそのコレクションをサンクトペテルブルクへ送った際に、自筆の送付品一覧を作成していたおかげで (シュトゥツェル一七九五)、その旧蔵書を大黒屋光太夫のそれらから区別することが可能であった。以下、現存書籍の確認をする際に用いた、シュトゥツェルによる送付品一覧のうち、書籍に関する部分をここに記載しておく (表2)。

### 3. 露米会社旧蔵書籍

一七九八年のブッセ目録と一八一八年のリポフツェフとカメンスキー目録との内容を照合してみたところ、前者に含まれるが、後者には見当たらない古典籍が、七点見出された。「セツヨウ」、「中華帝国の全図」、「ミヤコの地形図」、「三国通覧図説(5冊)」、「三国通覧図説付属地図」、「当地の魚の描写」、「サイコクホン」がそれらである。その一方で、後者には以下の表 (表3) に掲げた、前者にはない新しい一四点が記載されている。

この一四点の中で、四点の本には露米会社の封蝋が押されているので、それらは露米会社によって科学アカデミーに渡されたことが明らかである。露米会社によって科学アカデミーに渡されたクンストカメラ博物館の所蔵品については、A・Y・U・シニーツイン氏の論文がある (シニ

表2

I.A.シュトゥツェル自筆の送付品一覧通りの書名と注解	請求番号、書名	1798年目録	1818年目録
No.19.西洋錢譜、日本語から訳せばヨーロッパ志。あらゆるヨーロッパの硬貨を描写する。そのコレクションを持ったある大名が当時（1788年）わずか15歳の若い將軍の娯楽のために作った。前の將軍は、彼の一人息子である帝国の繼承者が狩獵の際、不幸に首を折ったことから、愁傷して崩じた。今の若い將軍は先に崩じた將軍の養子で、王朝の血統ではない。しかし日本人の中で養子は実子と同じすべての権利を持っている。現在の將軍の名前は源氏の長者徳川家斉である。	C-95 『西洋錢譜』	14) ヨーロッパにおける種々の硬貨の図譜	2) 日本で知られているヨーロッパの硬貨集ならびにそれらに伴う絵の説明。ヨーロッパの地図付き
20) 各頁にオランダ文字で日本語の名が記された、当地に生息する幾分の魚の描写、2冊	現存未確認 『海の幸』	16) 当地の魚の描写	なし
21) 植物についての本2冊	現存未確認	なし	なし
22) 内裏の朝廷について述べる本	現存未確認	15) 内裏朝廷の服装の絵本	27) 内裏朝廷の服装について
24) 江戸、または公方の首都。公方は内裏ほどの尊厳はないが、帝国の主人で、内裏に特権（知行か）を与えている。この地図は、私他の地図の訳し方の一例となる。	C-228 『分間江戸大絵図』	7) 公方の首都、江戸の地形図	22) 日本首都の地形図
25) ミヤコ、天皇が住んでいる内裏の首都	B-152 『名所手引京図鑑綱目』	9) ミヤコの地形図	なし
26) 長崎市。阿蘭陀人の住居となる出島、將軍の倉庫、中国人が住んでいる場所、私たちがいる人造の島を町から離す、長さわずか6呎の橋など、それから町も自分の筆で記した。他の地図に比べたら、作り方はさほど良くないが、詳細な地図である。	A-88 『肥州長崎圖』	11) 長崎の地形図	24) 長崎市の地形図

(229) 長崎に限らない（シェブキン）

<p>27) 日本語で「ニフォン」と呼ばれる日本帝国の全図。作り方がよく、私が知っている限りとても詳細なものである。</p>	<p>現存未確認</p>	<p>6) 日本帝国の全図</p>	<p>25) 日本国の全図</p>
<p>29) この5枚の地図のついた本は日本語で『三国通覧』という。カムチャツカに属する島々に住んでいる人の話である。その島々の名前は琉球、朝鮮、蝦夷である。のちにこの本と地図の翻訳も送る。</p>	<p>現存未確認 『三国通覧図説』</p>	<p>12) サンゴクツウラン一地理学の本5冊</p>	<p>なし</p>
<p>有名なドイツの解剖学者クルムスによる、『クルムスの解剖図』という本の翻訳。この本は最初にオランダ語に訳された。日本人はオランダ語以外の外国語がわからないから、この語だけから翻訳する。次の本はすべて日本語に訳されている。 ハイスターの『外科』 イギリス人ブーハンの本 スウェーデン人口ゼンシュタインの『児童の病』等</p>	<p>現存未確認 『解体新書』</p>	<p>18) オランダ語から訳した人体の解剖図</p>	<p>1) ドイツ語から日本語に訳した解剖学本。人体の絵入。5巻1冊。</p>
<p>32) この都での火災図は、赤で囲まれたところが、赤線の中にあるすべてが火災に包まれたことを表している。以下に記すのは、この激しい火災に関する私の日記の一部である。私は、火災が起こった9日後に着いた都からこの地図を持ちかえった。私たちは建物が全部燃えた都ではなく、郊外にある伏見というところに泊まったのだが、泊まった建物が高かったおかげでこの美しい街の悲しい焼跡が見られた。家を失った人たちは小屋やテントに宿泊していた。</p>	<p>C-321 『京都洛中洛外大絵図』</p>	<p>8) 内裏の首都、ミヤコの地形図</p>	<p>23) 都の地形図</p>
	<p>B-136 『摂州大坂大絵図』</p>	<p>10) 大阪の地形図</p>	<p>21) 摂州あるいは大阪の全図</p>

表3

1818年目録に記載された書名	請求番号	実際の書名	出版・ 書写年	蔵書印、 墨書等
3) 国家統治論、第3巻のみ	C-217	政談 第三巻		露米会社
4) 日本人の武術、第8巻のみ	A-35	武門要鑑抄 巻八		8番
5) 文武関係の雑録集、第1巻のみ	A-18	新版改正文化武鑑御大名衆巻 之一	文化元年	15番
8) 泰平時代の娯楽 或る人の画像付き1冊	B-147	真選実録泰平楽記		14番
9) 山についての記録1冊	現存 未確認			
10) 泰平時代の娯楽あるいは或る川 の描写、2冊	C-197 C-198	萬寶節用富貴蔵 字會節用永代蔵	文化元年 享和2年	18番 ミハイル・ ブルダコフ
11) 中国文人七人の詩の解説	C-215	明七子詩解	宝暦7年	露米会社
12) 赤いバラあるいは詩や能弁に関 する科目集、絵入1冊	C-209	萬世寶鑑 諸人万編重宝記図会手本 紅梅用文章顕徳大成 魚鳥虫獸並今川状入	天明6年	露米会社
13) 演戯について 1冊	B-15	絵本劇場年中鏡 中	享和2年	11番
16) 行書・草書の文集 絵入、1冊	C-104	童子用文初学大成	明和6年	4番
17) シン・ジャン（秀吉？）冒険譚 第5巻のみ	B-12	絵本太閤記	享和2年	2番
18) 日本文人が同国人学生のため に解説した有名な中国人の略伝集 最後の巻	C-52	標題徐状元補注蒙求巻下	明和4年	露米会社
28) 店舗商人の帳簿	A-47	大福帳	文化2年	
29) 商人の帳簿	A-48	簾貸帳	文化3年	

(231) 長崎に限らない（シェブキン）

ツイン二〇一〇)。それによると、科学アカデミーの図書館部門ペテルブルク支部には、露米会社が科学アカデミーに渡したもののリストが二つ保管されているとのことであった。それらを確認したところ、確かに一八一四年六月一六日付のリストには、「露米会社の封蝋が押された様々な本七冊」と「帳簿二冊」との記載があった（露米会社一八一四）。このことから、上記の四点の本と帳簿のA-47、A-48（サハリンアイヌ交易帳簿）は、このリストに記されたものと判断される。

また、一八一四年六月一六日付の露米会社リストの他に、もう一つ、一八一〇年二月九日付の、同じく露米会社が科学アカデミーに渡したもののリストがある。そのリストには、

- 文学、天文学、航法、物理学、地理学、美術など様々な科目の知識を与える本（18番）
- 地位や位階を表す家紋や標を写す本（15番）
- 古代の武士とその服装を表す本（14番）
- 歌論の本（8番）
- 演劇の本（11番）
- 日本の家、庭、狩などを描く絵本（2番）

が記載されている（露米会社一八一〇）。東洋古籍文献研究所蔵の本を調べたところ、確かに六つの本にはインクで上記の番号（2、8、11、14、15、18）が記されていたのである。その他に、同様に番号が記されている本が、いくつも見出された。これらの本は次の通りである。

- 2番 B-12 絵本太閤記
- 4番 C-104 童子用文初学大成

● 8番 A-35 武門要鑑抄 巻八

● 11番 B-15 絵本劇場年中鑑

● 14番 B-147 真撰実録泰平樂記

● 15番 A-18 新板改正 文化武鑑 御大名衆 巻一

● 18番 C-198 廣益日用字林・萬寶節用富貴藏・諸人重宝明鑑

このように、一八一〇年と一八一四年に露米会社が科学アカデミーに渡した日本の書籍が、現在東洋古籍文献研究所に保管されていることを明らかにすることができた。

なお、18番（C-198）『廣益日用字林・萬寶節用富貴藏・諸人重宝明鑑』には露米会社の支配人ミハイル・ブルダコフの封蝋が押されている。同様の封蝋は、サンクトペテルブルクにあるロシア国立図書館に保管されている次の六点（表4）の和書にも見つかった。

ロシア国立図書館の研究員O・V・ワシーリエヴァの論文によると、上記の六点は一八一四年にロシア国立図書館が開設されたことをきっかけにミハイル・ブルダコフ自身が館長のアレクセイ・オレーニンに送った（ワシーレワ二〇一四・七二―七三）。添付の書状は二つあるが、一八一四年五月一五日付のものに「これに添付して帝国図書館のために、地図、絵、武器等を伴う日本の本を送る。珍品で日本人にとって重要なものだ」と書いており、一八一四年五月一七日付のものに「私のところでまた日本の本が三つと文書が三つ見当たったが、これに添付して送る」と書いている。数は上記の表のと一致するが、最初に送られたのは『百万節用宝来藏』だと思われる（ワシーレワ二〇一四・七三）。

上記の一八一〇年と一八一四年に科学アカデミーと帝国図書館に渡された本は、どのような経路で露米会社に入ったのか。これについては、いくつかの考察をすることができるので、以下に述べておく。

表 4

請求番号	書名	出版・書写年月	墨書等
Дорн 861	『しよんこ乙名宛定書』 『岩佐太郎藏宛進藤弥七郎書状』	安永7年7月 不詳	6番 なし
Дорн 864	『日用記』	文化2乙丑年正月	3番
Дорн 868	『(手本)』	文化年間	5番
Дорн 869	『瀟湘八景詩歌』	寛政己未五月	4番
Дорн 871	『文林節用筆海綱目』	延享4年9月	1番
Дорн 872	『百万節用宝来蔵』	明和6年5月	なし

ミハイル・ブルダコフとともに露米会社を設立したのは、有名なニコライ・レザノフである。二人はともに、ロシア領アメリカ経営の先駆者グリゴリー・シェーリホフの娘と結婚していた。上記の書籍の大半は、寛政一一年（一七九九）から文化三年（一八〇六）の間に出版・書写されたもので、レザノフが率いた遣日使節により、収集された可能性が指摘できる。遣日使節を日本まで届けたI・A・クルーゼンシュテルンの航海日誌には、一八〇五年に長崎を去って蝦夷地の宗谷周辺にいた時に記された、次の記録がある。

「二日中、多くの日本の商人とアイヌが我々を訪れた。後者は干し鯨を持ってきてそれを服やボタンと交換した。鯨が安かったからか、ボタンを珍重していたからか、銅ボタン一枚に鯨五〇尾から一〇〇尾を与えてくれた。前者の商品は煙管、漆器、それから主に興味本位の絵が入った本だった。このような本はおそらく日本人の主な、あるいは唯一の読み物だろう。なぜなら松前からアイヌに売るために持ってこられたわけがないからだ。」（クルーゼンシュテルン一八一〇・五九）

また、A-48の『簾貸帳』の記録は樺太のクシユンコタンでつけられており、文化三年に途中で途切れることから、クリモフ先生による先行研究でも、A-47の『大福帳』とともにN・A・フヴォストフによる第一次蝦夷地襲撃の際に獲得されたという説が述べられている（クリモフ二〇一〇）。

なお、N・A・フヴォストフらによって一八〇七年の第二次蝦夷地襲撃の際に獲得された書物も、以下に述べるように、結果的にサンクトペテルブルクに持ってこられたが、そのルートは異なっている。いずれにせよ、N・A・フヴォストフは露米会社に雇われた海軍尉官だったのであるから、彼の手により一八〇六年に獲得された書物が露米会社に入ったことは、奇妙なことではない。



#### 4. N・A・フヴォストフらが獲得した日本古典籍

最後に、上に少し触れた、N・A・フヴォストフらによって一八〇七年の第二次蝦夷地襲撃の際に獲得された書物がサンクトペテルブルクに入った経緯について述べたいと思う。

一八四二年のブロッセ目録に入っている三点の本には、インクで「Секретарь 14-го класса Констатин Невстроев」(一四等書記コンスタンチン・ネウストローエフ)と書いてある。この上書きの他に、蔵書印などは伴わない。しかし、これと同じ上書きが、一九四七年に中央海軍図書館から東洋学研究所に移管された一六六の本にも見られる。

この一六六の本には、上書きの他に「水路誌部の図書館」の蔵書印が捺されている。この水路誌部の図書館は、中央海軍図書館の前身であり、一八二七年から一八三七年まで存在した。従って、上記の一六六が水路学局の図書館に入って蔵書印が捺されたのはその間のことである。

ブロッセ目録に入っている三点は、コンスタンチン・ネウストローエフの名前が入りながら蔵書印はないので、水路誌部の図書館に登録されずにそのままアジア博物館に渡されたことになる。それは恐らく一八三七年以前のことだと考えられる。一八四二年にアジア博物館で作成されたブロッセ目録に入っていることも矛盾しない。

このコンスタンチン・ネウストローエフの名前が入っている一九九の古典籍がどんな経緯でロシアに渡ったのかという問題については、長い間これを明白にする手掛かりを得ることが叶わなかった。しかし、今回実施された、同じブロッセ目録に入っている「キセリョーフ訳のロシア語表記入りの日本全図(皮箱入り)」の伝存在経緯の調査により、それを得ることができたのである。

この地図は、ブロッセ目録では一四番として記載されているが、東洋

古籍文献研究所の古文書室が保管する日本関係資料ならびに地図コレクションのなかには、その存在が確認できなかった。それが見出されたのは、東洋古籍文献研究所附属図書館が保管する資料のなかであった(ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所附属図書館、請求番号三七a/八四三)。

この地図は、二四枚の版画を129・0 cm×90・5 cmの布に貼ったもので、折り畳んで皮箱に入れる形となっている。箱には「日本国全図」とロシア語で書いてある。地図の上部には、「六六国に分けた日本国全図。キセリョーフ通訳によって日本語からロシア語に訳された」との付記を伴う。地図の地名や記号は全てロシア語で書かれている。記号欄の中に、「地名・記号の翻訳はイルクーツクで純粹の日本人が行なった」と書いてある。これらの記載の他には、地図がいつ、どこで出版されたのかについてなど、全く表記がない。

表記のキセリョーフは恐らく有名な若宮丸の漂流民の一人(善六か須田屋平兵衛)で、ロシアに漂着したのちに帰化して「ピョートル・キセリョーフ」というロシアの名前を受けた人物である。彼は、レザノフに属して通訳としてロシアの遣日使節と一緒に日本へ行くことになったが、長崎に向かう前にカムチャツカに残るように指示された。のちに、ワシーリー・ゴローニンを解放するように箱館へ向かったピョートル・リコルドに属して通訳として日本を訪れたこともある。それと同時に、一八一六年の閉校まで在イルクーツク日本語学校の教師でもあった。上記の地図は、恐らくキセリョーフがイルクーツクに住んでいた間に、つまり一七九五年から一八一六年の間に作られたものとみなされる。しかし、この地図は製作者が誰であったのか、どの日本地図を基にしていたのか、その日本地図を日本から誰が持ち帰ったのか、明らかではない。この地図は銅版画で印刷されているため、複数の所在が考えられる。

よって、ロシアの他の図書館のデータベースで調べてみたところ、ロシアではないが、エストニア国立公文書館のクルーゼンシュテルン関係資料の中に、同名の地図が含まれていることが明らかとなった(エストニア国立公文書館、*Φ. 1414, on. 2, r. 43, p. 63*)。

このエストニア国立公文書館所蔵本には、地図の表題の下に、「一八〇九年二月、イルクーツクで日本の原本からコピー・翻訳された。翻訳したのは九等通訳コロタイーギンと一四等通訳キセリョーフだった」と記されている。記号欄の中には、「日本の原本から一四等測量士ビョートル・ヴェンゲルスキーがやった。翻訳は九等通訳ニコライ・コロタイーギンとレザノフ付属の一四等通訳P・キセリョーフがおこなった」と書いてある。地図の枠外には、「その地図をもとに国立海軍省の二等学生コルマコフが描いた」と書いてある。地図のなかには、「原本の地図と照合したのは八等の県測量士ローセフである」と書いてある。

上記の情報をまとめてみると、一八〇九年二月にイルクーツクで日本の原本から一四等測量士ビョートル・ヴェンゲルスキーがコピーを作成し、八等の県測量士ローセフが原本の地図と照合した。翻訳をしたのはキセリョーフだけでなく、九等の県通訳ニコライ・コロタイーギンもこれに加わった。このコロタイーギンは、一七八二年に大黒屋光太夫と一緒にロシアに漂流して、一八一〇年に亡くなるまでイルクーツクで日本語を教えていた新三である。その後、この地図からペテルブルグで国立海軍省の二等学生コルマコフがさらにコピーを作成した。これはクルーゼンシュテルン自身の依頼で作られたもので、彼の蔵書に入ったと考えられる。

いずれにせよ、イルクーツクで作られた地図はペテルブルグに移動して、我々東洋古籍文献研究所蔵本(プロッセ目録に記される「キセリョーフ訳のロシア語表記入りの日本全図(皮箱入り)」)の原本にもなっ

た可能性が指摘できるのである。

次に、一九世紀のロシアで出版された地図や書物の諸目録を調べたところ、これと同種類の地図が、もう一件確認された。ニコライ・ゴールロフ著の『日本の歴史』に収録された「日本国全図」がそれである(ゴールロフ一八三五)。この地図には、「日本の原本は首都の江戸で真福三年に作成・出版された。西洋暦に直すと一七九六年になる」との記載がある。ロシア語の「真福三年」は恐らく日本の年号を指しているものと考えられるが、一七九六年は寛政八年に当たるから、明らかな誤解である。それでも、地図または本の著者が、日本の原本についての情報を有していたのは確かである。著者のニコライ・ゴールロフが一八〇八年から一八二九年まで二〇年以上イルクーツクで勤めていたことを考えると、彼が日本の原本を目にした可能性は高い。

また、モスクワにあるロシア国立軍事歴史文書館にも、同種類の地図が二つ所蔵されていることが、調査の結果確認された。一つは、アレクサンドル・ハートフが一八一〇年に作った「六六国に分けた日本国全図」である。いま一つは、一八〇九年にイルクーツクでフレデリクスが作った「日本列島と周りの国々、つまりロシア帝国の一部、モンゴル諸民族、南の諸島などの全図」である(ポーストニコフ二〇〇〇)。

さらに、今回の調査によりロシア海軍文書館に以下の地図が確認された。

1. 松前、樺太(サハリン)の一部から北日本の南部藩領までの日本北部、ならびに近隣のロシア領カムチャツカまでのイルクーツク県クルール列島を示す地図。

※一八〇九年一月、イルクーツクで日本の原本から作成・翻訳された。翻訳はニコライ・コロタイーギン、作成はビョートル・プシエニーツインであった。(ロシア海軍文書館、*Φ. 1331, on. 4, r. 136*)

## 2. 日本古代の都市・平泉の国の地図。

※一八〇九年一月、イルクーツクで日本の原本から作成された。翻訳はニコライ・コロタイーギン、作成はピョートル・ニキーティンであった。(ロシア海軍文書館、Φ. 1331, on. 4, p. 135)

3. 北緯二九度から四八度まで、サンクトペテルブルクより東経九六度から一二四度までの、コレア海、その周りの海岸、日本国とそれに属する太平洋の一部を示すメルカトル図。

※一八一一年に海軍省で作成された。日本の姿は日本の原本の地図から写された。海岸と諸島の位置は近年の航海者たちのデータに基づいて補整された。(ロシア海軍文書館、Φ. 1331, on. 4, p. 138)

## 4. 日本輿地路程全図。(ロシア海軍文書館、Φ. 1331, on. 4, p. 129)

上記の他に、ロシア海軍文書館では日本語で書かれた八八枚の図が入っているフォルダーも新たに確認された(ロシア海軍文書館、Φ. 1331, on. 4, p. 139)。ほとんどは日本の城郭の図であるが、林子平著『三通覧図説』所載の蝦夷地図や平泉などの地図もある。上記のニコライ・コロタイーギン訳の諸地図はこのフォルダーの地図からコピーされたと考えられる。

4番の『日本輿地路程全図』は、上記のロシア語で出版された諸地図の原本であるに違いない。これは一七七五年に長久保赤水によって作成・出版された有名な地図であるが、ロシア海軍文書館には寛政三年の「改訂日本輿地路程全図」が保管されている。上記の「真福三年」は「寛政三年」が誤訳されたものの可能性がある。

上記の地図の大部分は、一八〇九年一月から二月にイルクーツクで作成されたことから、それ以前にロシアにもたらされたことしか分からなかった。しかし、『改訂日本輿地路程全図』とフォルダーに入っている

八八枚の図のすべてに、「コンスタンチン・ネウストローエフ」の上書きが入っていることで、その伝存の経緯に関するより詳細な検討が可能となった。

先に触れなかったが、東洋古籍文献研究所のコレクションに入っている「コンスタンチン・ネウストローエフ」の上書きを伴う書物は、日付がないものもあるが、日付があるものは全て一八世紀末から一九世紀初頭までの間に作られている。そのうち、もっとも遅いものは、文化三年(一八〇六)一月五日の奥付を有する『論語上巻』の写本である。上記の一八〇九年までに入ったロシア海軍文書館所蔵の資料と合わせて考察すると、「コンスタンチン・ネウストローエフ」の上書きがついた全部の資料は一八〇六年一月から一八〇九年一月の間にロシアにもたらされたことになる。この日付に基づくと、文化露寇事件の時にこれらの資料がフヴォストフ等によって持ち帰られた蓋然性が高い。

そこで、発表されたフヴォストフ探検に関連するロシア側の資料を調べたところ、確かに一八〇七年にオホーツク港長のブハーリンがフヴォストフから回収した品々のリストの二番目に、「書物が入った箱と海図」がある(キリチェンコ二〇〇一)。また、『露米会社と北方太平洋の探検』という史料集の中にも、「オホーツク長官のブハーリンから日本の地図とフヴォストフとダヴィードフの日記を請求する必要性について、海軍省の下で艦隊の編成・用兵以外の科学技術・造船などの業務を担う海軍後方支援局 (Авиационный департамент Адмиралтейства) から海軍大臣チチャーゴフへの建白」が含まれている。その中に、次のように述べられた箇所がある。

「国立海軍局は、日本についての念書に基づき、フヴォストフ中尉とダヴィードフ兵曹長から、オホーツク長官のブハーリンが、ほか

の資料とともに、日本の地図を回収しました。また海軍後方支援局の局員でもあるシシユコフ中将がフヴォストフ・ダヴィードフから聞いたところ、資料の中に有用で興味深い探検日記や記録があることも把握しました。従って、ブハーリン大尉からその地図と記録の移管を請求していただけないでしょうか。」（露米会社一九九四・一九二）

この建白は、一八〇八年五月二七日付である。このことから、一八〇八年の春にベテルブルグへ帰ってきたフヴォストフとダヴィードフが、シシユコフ中将に日本の地図がオホーツクにあることを教えたことがわかる。上記の史料集には、海軍大臣チチャーゴフが、これらの地図や資料を海軍後方支援局へ一八〇九年七月六日に渡した、と書かれている（ロシア海軍文書館、*Ф. 166, on. 1, r. 2459, r. 6*）。

同年七月一八日付の海軍後方支援局の学術会議で、シベリア知事よりの書状と付属の地図や書物のリストが読み上げられた。知事よりの書状は、次のようなものであった。

「一八〇八年六月一七日付の、オホーツク長官のブハーリンから日本関連資料を回収せよという閣下からの指令書の実施は、イルクーツク民政長官に任せられた。爰に、ブハーリンから回収した地図や書物を民政長官から受け取り、これに添付する。民政長官殿はもともと興味深いものをロシア語に翻訳させたかったが、イルクーツクには翻訳できる者がいないので、実現しなかった。できたのは、満洲語の翻訳者が書名のリストを作成したことに限られている。日本帝国の地図の翻訳は、書物に比べてさほど難しくないので、コピー作成やロシア語訳のために、いったんイルクーツクに残されたが、

その後地図もこちらに渡されたので、これに添付する。」（ロシア海軍文書館、*Ф. 315, on. 4, r. 48, pp. 151-152*）

この書状には、書名がロシア語に訳された地図や書物の一覧が添付されている。全部で五一点で、その中の一五点は現在東洋古籍文献研究所に保管されていることが確認できた。この一五点の書籍の表紙の裏には、それぞれ内容が書名の一覧と一致するロシア語訳の書名が書かれた付箋がある。残りの三六点の大半は、現在もロシア海軍文書館に保管されている。

最後に、フヴォストフとダヴィードフが、これらの地図や書物をどこで入手したのかについて、二人による次に掲げる報告書に基づいて、検討してみたい。

「一八〇七年六月二五日、ロシアの船は利尻島に近づいて、日本人の集落をいくつか確認し、その近辺に小さな船二隻と大きな船一隻を見た。ユノーナ号は集落に近づき、数人の部隊を上陸させた。日本の船には人がおらず、積み荷には塩漬けの魚、鰯の燻製、油、数俵の米があった。その船は松前島北部か千島から戻ったとフヴォストフは判断した。

六月二七日、アヴォーシ号もユノーナ号の近くに碇泊した。すると、そこにも日本船が二隻あり、一隻は奉行、僧侶、四〜五人の兵士、大砲や他の武器を、アニワ湾に届けるように見えた。人はそれ以前に利尻島の奥に隠れたようで、船にも岸にも誰もいなかった。アニワ湾に向かった船は、日本からの船だった。その中に、ナジェージタ号が長崎に碇泊していた時の記録、日露交渉の文書、レザノフの肖像画などが見つかった。その他に、船には多くの地図、オラン

夕人からコピーされたような地球儀、アニワ岬やクリリオン岬の図なども見つかった。ユノーナ号はその船から米や他の荷物を積んだ。他の船には魚ばかりあった。この船は六つの碇で村の近くに碇泊していたから、魚はこの村で積み込まれたようだった。日本からの船は赤いペンキに塗られていた。日本人によると、それは国の船であることを意味しているそうである。午後、価値のある荷物や米を全てユノーナ号に積み込んで、小屋や船を焼き払った。」(キリチエーシニコ二〇〇一・一一)

この記録から、日本の地図や資料がロシアに渡った経緯が明らかになる。一八〇七年七月一六日、フヴォストフとダヴィードフが第二次千島・樺太探検からオホーツクに戻ると、オホーツク長官ブハーリンによって荷物と一緒に逮捕された。その後しばらくして二人は逃走し、一八〇八年の始めまでにペテルブルグに戻り、そこでシシニコフ中将と会った。

一八〇八年五月二七日、海軍後方支援局はブハーリンから日本地図を求めよう海軍大臣チチャーゴフへ建白を出す。六月一七日、チチャーゴフはシベリア知事へ、シベリア知事はイルクーツク民政長官へ、イルクーツク民政長官はオホーツク長官へその依頼を伝えた。地図や他の資料がイルクーツクに届いた後、コロタイギン等がそれらをコピー・翻訳して、ペテルブルグに送った。海軍後方支援局の学術会議でその資料について報告が発表された。そこに出席したクルーゼンシュテルンは恐らく地図が気に入って、そのコピーを作成・入手した。

以上が、フヴォストフとダヴィードフが日本から略取した地図などが、露米会社経由とは別に、オホーツク長官らを経由して海軍の手に渡った経緯である。

#### おわりに

上記の考察で明らかにされたのは、一八世紀末から一九世紀初頭にかけてなされた日露間の接触の数々が、近世日本から帝政ロシアへの書籍(和書)の流れと密接に連動し、拍車を掛けていることである。

今回あまり触れなかったが、それは安永年間のロシア人蝦夷地渡来の際にいくつかの日本語の文書を獲得したことから始まっている。その後、ラクスマンが率いる第一次遣日使節直前に大黒屋光太夫がもたらした書籍が存在し、次いで同遣日使節の影響も考えられるI・A・シユトゥツツェルによって招来された書籍が確認される。続いて、レザノフが率いる第二次遣日使節とフヴォストフによる一八〇六年と一八〇七年の蝦夷地航海の際に数多く獲得された書籍・地図などが、長崎とは別の、松前・蝦夷地を経由しての新しい北のルートによってもたらされることとなった。

以上のことから、コレクション形成史による視点は、黎明期、すなわち一八世紀末から一九世紀初頭にかけての日露関係史の研究に大きな貢献ができると考えるものである。

#### 〔参考資料・文献〕

ブッセ一七九八: *Catalogus Librum Sinicorum, Manschuricorum, Japonicorum nec non Mongolicorum, Tibetanicorum que in Imperiali Petropolitanae bibliotheca qui usfematus Petropoli IV Julius — September 1798* // *Архив востоковедов*. P. 1. От. 1. No. 140. Л. 23.

カメンスキー一八一八: Каменский П., Липовцев С. Каталог китайским и японским книгам, в библиотеке Императорской Академии Наук хранящимся, по препоручению Господина Президента оной Академии, Сергея Семеновича Уварова, вновь сделанный. СПб., 1818. 57 с.

ベトローワ一九七〇: Петрова О. П. Коллекция книг Дайкокуя Кодано и её

значение для истории русско-японских культурных связей // История, культура, языки народов Востока. М.: Изд-во «Наука», Главная редакция восточной литературы, 1970. С. 51-58.

シトチヤツトスル一ヲ九五: ПФА РАН. Ф. 1. Оп. 2-1795. No. 1. Дл. 3-60б.

シトチヤツトスル一〇一〇: Синьян А. Ю. Вклад Р.А. Ксенофонтовой в изучение истории японских коллегий МАЭ начала XIX в. // Кюнеровский сборник: Материалы Восточноазиатских и Юго-Восточноазиатских исследований. Этнография, фольклор, искусство, история, археология, музееведение. 2008-2010. Вып. 6. СПб.: МАЭ РАН, 2010. С. 306-314.

露米会社一八一〇: ПФА РАН. Ф. 1. Оп. 1-1810. No. 37. Д. 6-6б.

露米会社一八一四: ПФА РАН. Ф. 1. Оп. 2-1814. No. 8. Д. 8.

ロシアノロシア: Васильева О.В. «В пользу Императорской Пугбичной Библиотеки.»: приращение фондов восточными манускриптами в 1812-1814 гг. // Страны и народы Востока. Вып. XXXV. Коллекции, тексты и их «биографии». М.: Наука — Восточная литература, 2014. С. 61-81.

クルーヂヤツトスル一八一〇: [Крузенштерн И. Ф.] Путешествие вокруг света в 1803, 4, 5 и 1806 годах. По повелению его Императорского Величества Александра I, на кораблях Надежде и Неве под начальством Флота Капитан-Лейтенанта, ныне Капитана второго ранга, Крузенштерна, Государственного Адмиралтейского Департамента и Императорской Академии Наук Члена. Часть 2. СПб., 1810. 476 с.

クリモフ二〇一〇: ワジム・クリモフ「サンクトペテルブルグ東洋古籍文献研究所(旧東洋学研究所)所蔵の交易帳簿について」(『東京大学史料編纂所研究紀要』第二〇号「二〇一〇年三月」一五一—一五四頁)。

ゴールロフ一八三五: Горлов Н.П. История Японии. М.: в типографии М.

Пономарева, 1835. 300 с.

ホーランドの歴史: Rosnikov Alexei V. Chapter 1: Outline of the History of Russian Cartography // Regions: A Prism to View the Slavic-Eurasian World. Towards a Discipline of "Regionology". Sapporo: Slavic Research Center, Hokkaido University, 2000. P. 1-49

キリチヤツトスル一〇〇一: Кириченко А.А. Пиратские корабли «Юнона» и «Авось» // Информационно-аналитический бюллетень Депутатской группы по связям с парламентом Японии No. 8. Специальный выпуск. Апрель 2001 г. 16 с.

露米会社一九九四: Российско-Американская компания и изучение Тихоокеанского севера, 1799-1815 (Исследования русских на Тихом океане в XVIII - первой половине XIX в. Том 3). М.: Наука, 1994. 275 с.

本研究集会は、基盤研究S「マルチメディア的的手法による在外日本関係史料の調査と研究資源化の研究」(課題番号二六二二〇四〇二、研究代表者: 保谷 徹)の一環として、その経費の一部も使用しておこなった。